

米欧亜回覧

第90号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

「令和」時代の新しい運動方針を論じ合う

―平成最後の日(四月三〇日)に総会開催

年次総会は四月三〇日(火)日比谷図書文化館の四階ホールで行われた。

一部では事業報告、決算報告、その他の総会議事がおこなわれ(当日配布資料は別紙添付参照)、休憩の後、二部においては、二つの課題について論じられた。

前半の課題は、二月にミネルヴァ書房から刊行された「岩倉使節団の群像、日本近代化のバイオニア」並びに三月に刊行された当会本「歴史のなかに未来が見える〜日本近代一五〇年を考える&自然・伝統・文明の



4月30日年次総会 (日比谷図書文化館)

交響」についての読後感、評価であり、各人各様の発表が行われた。

後半の課題は、二〇二二年を迎える岩倉使節団派遣一五〇年を記念して、それにふさわしい事業は何か、を論じ合うことになった。なお、このテーマについては事前に全会員にアンケートを配信し、その「まとめ」を基に行われたので、いろいろなアイデア、企画が提示され熱心な討議が行われた。

(詳細は二頁参照)

一五〇年記念事業の大枠、「何を、誰が担当するか」

―新方針と新組織決まる

総会の議論を承けて、一五〇年を目指して「何をなすべきか」、「誰が担当するのか」につき、五月二五日に第一次の幹事会を行い、七月二二日には第二次の幹事会が開かれた。単なる思いつきやアイデアではなく、現実化できる可能性を前に、誰がコアとなって推進していくかが討議された。

泉理事長よりの提案に基づき、岩倉使節団の研究調査をもっと進めること(リサーチ・コンテンツの充実活動)、それをいかに伝えるか、知らせるか(プレゼンテーション活動)、そして「歴史の中に未来が見える(オピニオン活動)」の三つの側面から討議することになった。

その結果、新しい当会の活動方針と新組織の編成となった。その内容は二・三頁に紹介されており、会員みなさんもそれぞれの志と想いで、この記念事業の運動に参画してほしい。また、新たな企画があれば申し出てほしい。

なお、この記念事業はこれまで二〇二二年と大雑把に曖昧に表現してきたが、明確に何月と規定する必要がある、この長大な旅のサミット、つまり六三二日の真ん中あたりを記念にしたらどうかと考えた。それは使節団が米英の回覧を終えヴィクトリア女王に謁見するのが一月五日であるから、その辺を基準に考えればよかるうという意味である。

もともと、現時点では諸企画は予備調査の段階と違ってよく、実際に始動するのはこの秋からになるだろう。そうなればまるまる三年はあることになり、その間に随時事業を進め具体化していけるとの読みである。

岩倉使節団は「明治四年のアンバツサドル」ともいわれた。それはアンバサダーのオランダ語読みであり、陰暦の明治四年一月一二日(陽暦二月二三日)に横浜を出帆したからだ。しかし、旅はなんと六三二日にも及び、帰国したのは明治六年の九月一三日である。それはジュールヴェルヌが「八十日間世界一周」を書いた一八七二年と同時代であり、その大旅行によって日本近代化の路線が決ったという意味でもまさにわが国にとつての「グランドツアー」であった。

「岩倉使節団」の実像をもっと調べ、もっと伝えよう!

泉 三郎

冊の報告書を刊行したことである。しかし、このシンポジウムと報告書については、テーマが大きく広範だっただけに、「意盛んなれど力及ばず」の面も少なくなかった。残された課題が大きいという反省である。そこであと三年を懸けその仕上げをやるうじやないか、ということである。それは三段式ロケットにも喩えられる。一段目がグランドシンポジウム、二段目が二冊の書物、三段目が目下企画中の各種の記念プロジェクトということになる。

それを一言でいえば、いまだ埋もれて知られざる「岩倉使節団の実像」を「もっと調べ、もっと多くの人に伝えよう!」ということである。その合言葉は「ミッション、ミッション、クリエーション・・・そしてリサーチ&プレゼンテーション」である。来たれ夢追い人よ、「令和四年までに岩倉使節団を甦らせよう!」。それをみんなの力で実現しようではないか、志高き皆さんの深い理解と熱き協力を仰ぎたい。

平成三〇年度 年次総会開催

平成三〇年度(二〇一八年度)米欧亜回覧の会通常総会が去る二〇一九年四月三〇日(火)午後一時半より日比谷図書文化館四階小ホールで開催された。

泉三郎代表は冒頭の挨拶の中で、二年前の二〇一六年二月に開催された当会設立二〇周年記念シンポジウムや、本年ミネルヴァ書房より出版された「岩倉使節団の群像」と当会本「歴史のなかに未来が見える」をステップとしていよいよ三年後には使節団派遣一五〇年を迎えることに言及。本年度に一五〇年記念プロジェクト推進に着手したいので広くそのアイデアを求め



平成30年度年次総会 (4月22日)

たいとの呼びかけがあった。事業報告、決算報告、その他総会議事

その後、総会の議長として理事・事務局長の近藤義彦氏を指名選出。定足数の確認、議事録署名人の選定手続に続き、平成三〇年度会計収支報告、令和元年度事業計画ならびに予算案が承認された。

一号議案では平成二九年四月二十八日に就任した役員(理事・監事)六名は任期満了となるが、下記の通り幹事一六名とともに再任が承認された。

泉三郎(理事長)、塚本弘(副理事長)、小野博正(理事)、岩崎洋三(理事)
近藤義彦(理事・事務局長)、西田親行(監事)
幹事・畠山朔男、植木園子、吉原重和、庵原義文、小泉勝海、多田直彦、中山進、難波康熙、政井寛、森本淳之(順不同・敬称略)

第二号議案 平成三〇年(二〇一八年)度事業報告(活動報告)

第三号議案 収支報告(活動計算書・貸借対照表・財産目録)

第四号議案 令和元年度事業計画(活動計画)

第五号議案 予算が下記各部会の説明のち承認された。

歴史部会(小野博正氏)、実記を読む会(岩崎洋三

氏)、英書輪読会(岩崎洋三氏)、グローバル・ジャパン研究会(畠山朔男氏)、i-Cafe Lecture、i-Cafe music(植木園子氏)、広報・メディア委員会(MEWS、HP、FB)(吉原重和氏)

幹事会の討議

その後の幹事会で「使節団一五〇周年」プロジェクトへの取組や具体案を一步進めべく討議が重ねられた。また基本方針案(何をやるか、誰がやるかの案・七月一日付けと七月二二日付け議題)にある新組織案が泉氏より提示され、それに基づき次のような意見の交換があり、概略の方向が決まった。

「何をやるか」の具体的な活動について
・先の総会で泉氏から提示された目的とアプローチは次の通り。

・岩倉使節団(「実記」も含め)の調査研究、そこにこそこの活動の「コンテンツ・リサーチ」と呼称する。

・その成果(資料、データ)を、より広く多くの人(老若男女を含む)に知らせるため、いかに整理編集し、各種のメディアを活用して伝えていくか。この活動を「プレゼンテーション」と呼称する。

150年記念 夢のプロジェクト 歴史の中に未来が見える

リサーチ

- 岩倉使節団の研究
- ・コンテンツづくり
- ・人物、関係図
- ・留守政府との関連
- ・宗教問題への取り組み

「子孫の会」の形成
リサーチャーを増やす

ミュージアム

バーチャル(デジタル) or 常設施設(リアル)

プレゼン

- 岩倉使節団を知らせる
- ・DVD映像講演会の展開
- ・新聞/TV局とのタイアップ
- ・小中高校とのタイアップ
- ・郷土歴史資料館との連携

漫画・アニメ・映画化
『岩倉使節団事典』
副読本・手引き等

映像化

国民特に若い世代に
広く伝える

オピニオン

- 現未来戦略を考える
- ・岩倉使節団のメンバーが「令和の日本」をみたらどう思うか、発言するか

提言プラザ
スピーカーズ広場

シンクタンク

発信・提案する

注記；この図は、泉三郎氏の呼びかけに応じて浮上したアイデアを整理したものです。3年計画とは限らず、5年、7年計画のものも含んでいます。

・当会の目的は、ただ単に過去の歴史を学び、それを伝えるにとするだけではない。現今直面する重要課題につき、批判に終わることなく建設的意見、提言として歴史から学んだ知恵を活用し発信していくべきだと考える。その活動を「オピニオン」と呼称する。

以上のコンセプトを現在までは新設の部会活動に具体化すると次のようになろう。

一、リサーチ・コンテンツの充実、調査研究活動

①「実記」を読む会、「原典」輪読会…解説、注釈、総索引など

②歴史部会…岩倉使節団の群像」の補充、「全書」の全体像」の調査

個別テーマ、たとえば宗教問題、留守政府問題などの研究

③リサーチャーの増員…子孫への呼びかけなど

二、プレゼンテーション…記念事業関連、企画調査活動

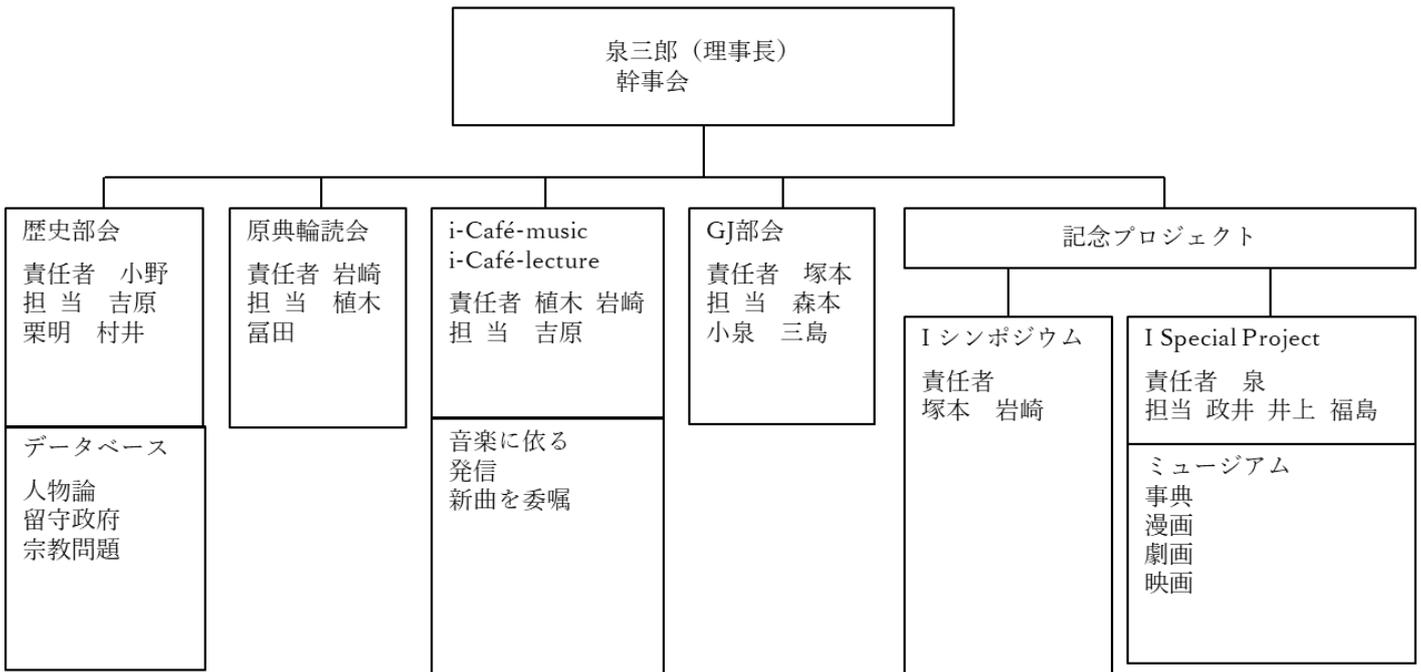
①バーチャルミュージアム、漫画、劇画、アニメ化、映像化構想など

②記念シンポジウムの構想

三、オピニオン…歴史から現未来への発言活動

①当会の諸活動、とくにグローバルジャパンでのこれまでの実績を踏まえ、現実の重要課題につき建設的な意見の発表討議を行う。

米欧亜回覧の会 150周年記念プロジェクト企画 組織図



幹事会後の懇談会 (7月22日)

②テーマを絞り込み外部講師も積極的に招き熱気ある公開討論会を行う。

③最新のメディア、YouTubeなどの活用も考慮する。

ただ、現時点では多くが企画途上にあり、今後の幹事会、全体例会を通じて、内容や組織について補正が行われる可能性のあることをご理解いただきたい。

☆新会員自己紹介☆

三島研一
早稲田大学エクステンションセンターで泉三郎先生の岩倉使節団の講義を受けました。これを契機に明治維新後の政治から産業(紡績、鉱山、鉄鋼、鉄道、海運)関連の本を色々漁るようになりました。

ました。痛感したのは海外視察、留学者とお雇い外国人の貢献が大、かつ自らのものとするまでの苦労です。今回泉先生からのお誘いがあり入会いたしました。戦後、現代の海外との交流との比較といった面を考えてみたいと思います。

鎌田 昭良

今般、入会させて頂くことになりました。防衛省という役所に三四年勤務し、五年前に退職し、今は防衛省関係の公益法人に勤務しております。昨年、早稲田八丁堀校で行われた泉先生の御講義に参加したことから、先生に入会を誘われ入会させて頂くことになりました。宜しくお願ひします。

浜地 道雄

憧れのNYCに赴任したのは一九九二年。異文化(宗教)衝突に直面。そんな時泉三郎さんが「飛鳥」に乗って(洋上セミナー)来訪。それを機に「実記」を英文化(骨子)。二人で東海岸(WDC、NYC、BOS)と西海岸(SF、LA)に「セミナー巡業」しました。以来、世界各国を回りながら、いつも思うのが「実記」の巻頭にある「観光」(光Ⅱ異文化Ⅱを観る)。現下の「地球儀俯瞰外交」に不安を募らせている今、本会に(再)入会。温故知新を期待しています。

米欧回覧実記
輪読会報告
英書(フルベッキ)輪読会報告



担当幹事
岩崎 洋三

■四月二二日 実記輪読会
第十七巻「ワシントン」市後記
(富田兼任)

避暑のため多くの人が都会を離れ、この時期ワシントンは閑散としていた。ナイアガラやサラトガスプリングスの例を引き、肥前の温泉などは旅館業に力を入れたらよいと記述。

南部のタバコ、米、綿花、サトウキビ産業を概括、日本米は人気高いので遠距離の輸送法さえ確立すれば輸出も可、と輸出振興にも言及。久米の着眼は現代に通じる。

南北戦争の経緯を調べた。グラント大統領は戦争終結時の北軍将軍で勝利の立役者。一七二〇年の記録ではバージ



ボストンの繁華街 (『実記』)

ニア州で88,000人の内黒人が27,000人。自由擁護を掲げるアメリカ独立精神を信奉する北部は、ロッキーマウンテンの準州などを連邦に組み込むにあたり連邦議会で自由州か奴隷州かで南部と勢力争い、一八六〇年リンカーンが大統領になると翌年南部諸州が連邦離脱を宣言、南北戦争が勃発、奴隷制を巡る連邦維持か否かが要因。

使節団が訪れた時期は、南北戦争後のバブル景気が沸いていたため経済的余裕が国を挙げての使節団大歓迎に通じた、との見方もある。富田命保日記によれば、五月二二日帰国していた小松治氏がワシントン帰着、とある。

■五月八日 実記輪読会
第十八巻『費拉特費府ノ記』
(岩崎洋三)

ワシントンから使節団に同行したワシントンDC知事Henry Cookeが、フィラデルフィア近郊の同氏実兄のJay Cooke邸に案内し、使節団はそこに二泊した。

フィラデルフィアは、独立宣言が調印され、当初アメリカの首都だったことから、使節団は議事堂や造幣寮等を見学して多くを学んでいるが、金融家で独立戦争の北軍軍資金調達を一手に引き受けて勝利に貢献したJay Cookeの『大少ノ面額各房ニ充ツ』五〇室

を超える広大な邸宅で、同氏から西海岸とミネソタ州を繋ぐ4000マイルに及ぶ鉄道開発や、スペリオル湖の港町ドゥルースを第二のシカゴにして、セントローレンス川經由大西洋に至る3700マイルにも及ぶ水運を繋げて両大洋を結ぼうとの巨大構想を聞いて感銘している。

後日談だが、欧州における普仏戦争終結後のインフレと、アメリカの鉄道等の過剰投資から1873年恐慌が勃発し、Jay Cookeの銀行は倒産、邸宅は女学校になった。

■六月二二日 実記輪読会
第十九巻「新約克府ノ記」(吉原重和)

五月二六日 アスター図書館、聖書協会、YMCA、障害児の病院、シュワルト氏の商店、トリビューン新聞、NY私立大学を訪問。

五月二七日 フランクリン氏の商店、ハーパース・ウィークリー社訪問。午後フェリーにてロードアイランド州に向かう。牡蠣がもたらす利益について触れている。久米は聖書協会とYMCAの訪問のあとに彼の「宗教論」を述べているのは注目される。

■七月一〇日 実記輪読会
第二十巻「ボストン市」(富田兼任)

六月二八日〜七月三日ボストン滞在。プロビデンス港か

らボストンに入る。ボストン市内の学校、消防署等を見学。木戸・伊藤組と大久保・山口組二手に分かれ、西方50kmハドソンタウン、北70kmローレンスに行き、紡績工場等の工場視察、また歓迎を受ける。三日ボストンを発ちキューナード社の汽船で英国に向け出港。

□四月一七日フルベッキ輪読会
フルベッキの伝記『Verbeck of Japan: A Citizen of No Country』(全376ページ)の輪読会がスタート(英書輪読会世話人 岩崎洋三)

岩崎氏が、二〇一三年にある会の紀要に投稿した『フルベッキ』明治新政府の顧問に招聘され、日本近代化に貢献した宣教師の抜刷を回覧し、米国オランダ改革派の宣教師として長崎着任から青山外人墓地に葬られるまで、博学な知識、流暢な日本語、幅広い人脈を駆使して、教師として、政府顧問として、日本の近代化に貢献したフルベッキを概説した後、「前書」と第一章Aを輪番で音読しながら『フルベッキ輪読会』は無事スタートした。

Journal of Townsend Harris を輪番で音読しながら読み、一七年目となった四冊目に、条約締結一四か国に大型政府使節団の派遣を提言して岩倉使節団の実現に貢献したフルベッキの伝記を読むこととなった。本著はWilliam Elliot Griffisが1900年に出版したものである。

この日の出席者一〇人の中に当初からの会員が二人もいた一方、新入会員も二人加わり、活発な論議が出来て、楽しみが倍加した。輪読会はテキストを漏らさず音読することを原則にしているが、音読は間違いなく快感である。新規参入大歓迎です。一度ぜひ覗いてみてください。

□五月八日フルベッキ輪読会
『日本のフルベッキ第三章 Koppel (ツッペル)』(市川三世史)

Verbeck of Japan Chapter II. The Koppel: Page 29~47
フルベッキの出自の紹介と、青少年時代に長く暮らしたザイストの描写が主体である。フルベッキの名は、小川または細流を意味し、オランダおよびドイツに見出せる。ザイストは居住者六〇〇〇名の美しく、ラインの支流が中心を流れる小さな町であり、モラビア人のコミュニティがあった。家族は居住地をライゼンベルグからザイストに移し、コッペル(カップル)と呼ぶ家に住んだ。ガイドはオ

ランダ、イギリス、フランス、ドイツの四か国語を流暢に話すことができた。

ユトレヒトの工科学校でグロツテ教授のもとで学び、ここで語学に急速な進歩を遂げている。各国語に堪能なグイドはナポレオン法典、ドイツ国法、聖書の翻訳者でもあった。その後の、彼の進路を定める家族会議において、「工学」がとるべき職業であると、満場一致で意見がまとまった。

六月一二日フルベッキ輪読会「日本のフルベッキ」(大森東亜)Ch.IIIn the Land of Oppor-tunity(海軍(国))

アメリカに移住し、七年後米国オランダ改革派の日本派遣宣教師に選ばれ、一八五九年五月、ニューヨークを出航し、一月上海を経由して長崎に着くまでの物語である。

フルベッキをアメリカに向かわせたのは、ニューヨーク在住のモラビア派牧師の義弟ヴァン・デュールの勧めだった。フルベッキはとりあえずタンク師の鋳物工場で約一年働くことになった。この時「立派なアメリカ人になる」決意をし、名前をフェルビークから、アメリカ人が呼びやすいヴァーベックに改めた。一八五八年に日米修好通商条約が締結され、翌年には米宣教師の日本駐在が可能と

なった時、米国オランダ改革派は最も積極的に、三人の宣教師を日本に派遣することにした。中国伝道経験の長いブラウン、医師のシモンズが選ばれ、三人目に「アメリカ人化したオランダ人」として神学校を卒業したばかりのフルベッキが選ばれた。
七月一〇日フルベッキ輪読会「日本のフルベッキ 第Ⅳ章 A GLANCE AT OLD JAPAN」(市川三世史)
Varbeck of Japan Chapter IV. A GLANCE AT OLD JAPAN: 日本寸見Page 69~79
赴任先である当時の日本の状態を述べている。
(1298) マルコポーロの東方見聞録の「黄金の国ジパング」の見出しに、ヨーロッパ人は大きな興味を持った。
(1540-1620) ある宗派のキリスト教が約一〇〇万人の信者を獲得し、宣教師の組織、その後の災害と殉教者の詳細な歴史も素晴らしかった。
(1604) 徳川家康はキリスト教の弾圧、すべての外国の理念と影響の排除を始めた。
(1637) 島原の乱において、多くの殉教者が出ている。
・ 権威の名目上の中心は京都、武力と財政の中心は江戸。江戸の権威は遠方に及ばず、地方の貴族と大名は世襲の領地を固守していた。

・ 宣教師は仏教を悪魔の宗教とみなし、キリスト教のみが人を救う道であると説いた。
・ 武家は全人口の一〇分の一から構成され、知的な文化と精神的な規律を持つていたが、キリスト教にとり最大の、友人となる信者でありかつ敵となる暗殺者であった。
・ オランダ船はニュース、科学、装置類、ヨーロッパの原産物、土壌のおよび精神的な病原菌をもたらした。

・ フルベッキと武装した外交官の護衛は、仏教信者と残酷なスパイと、国家の命ずる剣の存在を感じ取ったため、これに対抗する手段を見出す必要があった。

・ 日本には一〇〇〇年におよぶ文学で明らかにされた知性があったが、国家の思考の種類と品質の総合力は、古代の大国、または主要ヨーロッパ諸国と比肩できるランクではないとみられた。

歴史部会報告



幹事 小野 博正

五月二〇日『今、ジョン万次郎を語る―漂異紀畧』(ひょうそんきりやく)出版を期に

北代淳二氏(東京・国際

ジョン万次郎協会会長)と谷村鯛夢氏(漂異紀畧・現代語訳者・俳人) 招いた講演会。参加二一名。

土佐の漂流漁民・ジョンマシントンことジョン万次郎は、鳥島に漂着して、捕鯨船ジョン・ハウランド号の船長・ホイット・フィールド船長に、仲間四名と共に救出された。

捕鯨に従事した後、一人米国東岸のフェアヘブンで三年間教育を受けた。更に六年余の捕鯨船経験を積んで、カルフオルニアの金鉱で六〇〇ドルを稼ぐと、「二重に鍵をかけられた祖国」日本の門戸を開こうと思いついて、一〇年ぶりに沖繩に決死の上陸を試みる。実効支配の薩摩藩に移送され藩主・島津斉彬に西洋事情と船の技術を伝える。

長崎奉行所の聴取を経て、帰り着いた祖国土佐藩で絵師・河田小龍の聞き語りで完成したのが「漂異紀畧」である。この情報は、即座に江戸幕府に伝えられて、米国情報を渴望していた老中・阿部正弘に召され、幕府直参に取り立てられ中浜万次郎を名乗り、江川英龍に預けられる。不幸にして、水戸の徳川斉昭が、米国有利の通訳をしかねないかと警戒したため、米国の交渉通弁には起用されることはなかったが、佐久間象山、吉田松陰や雄藩藩主・藩

士らへ多大な影響を与えた。John Mung Japanese と自署し、日本人を意識した最初の日本人であろう。身分制の厳しい幕府が、能力のある万次郎を起用し、外国情報を求めて言論の自由を開いたことは、結果的に日本を開国に導いた陰の主役であり、明治維新での下級武士の人材登用にもつながる画期を開いた人とも思われる。

それにしても、万次郎の聞き語りで見せた細部までの記憶力の正確さと、たった三年の教育とは思えない端正な英語文章力や的確な文明把握は驚嘆に値する。因みに当時の捕鯨は、最先端のグローバル産業であり、船は技術の先端であり国際化(民族共生、能力主義)の場でもあった。(文責:小野博正)

六月一八日『英語の師匠―岩倉使節団一等書記官・何禮之』

何禮之(がれいし)は、長崎の唐通事の家系に生まれた。何一族は、明の滅亡に際し、江戸の初期に日本に亡命し、長崎で代々、唐通事を営んできた。唐通事は、単なる通訳の通詞にとどまらず、貿易実務にも関わっていた模様。講師の金子氏(テレソフト会社)点字ソフト、機器製造販売(代表取締役)は、何一族の天草分家の出身。

何禮之は、七歳で家督を継ぎ一五歳で、これからは英語の時代と見極めて、長崎の唐人より『華英・英華事典』を求めて独学を始め、長崎英語伝習所や居留地内の中国人や英米人(フルベッキなど)から発音を学ぶ。そして、英語稽古所学頭の幕臣に取り立てられ、長崎の私塾と大阪・江戸の私塾で英語を教え、百數十名を育てる。

岩倉使節団関連の弟子だけでも、山口尚芳(副使)、瓜生震、日下義雄、中島永元、岸良兼養、萩原三圭など多彩。岩倉具視にも、訳書のモンテスキューの『法の精神』など進講している。回覧中は木戸孝允と同行し、また一緒に帰国しているの、木戸との接点も深い。青山霊園に眠り、墓名碑「徳種」(恩徳を他人に施す人)。「音容如在、葬掃維勤」(お墓参りのたびに、声や姿が目に見えかぶ)に人柄が偲ばれる。何禮之日記は東大図書館に寄贈されている。幕臣ながら貴族院議員まで務めたのは、中国出身、何一族の日本に溶け込む精神の発露かと。(文責 小野博正)

■七月二二日 『タウンセンド・ハリス』初代米国総領事が日本にもたらしたものの(岩崎洋三)

初代米国駐日総領事として1856年下田に来航し、日本の

開国を果たしたハリスの奇な生涯と功罪を論じた。
一) ニューヨーク時代より出生からニューヨーク市教育委員会委員長まで

ハリスは1828年にハドソン川に沿った小さな村で、帽子屋の五男として生まれた。先祖はウェールズ移民である。父方の祖母は、ハリスに『真実を語れ、神を畏れよ、イギリスを憎め』と教えた。タウンセンドの名はこの祖母の旧姓でからもらっている。

一三歳の時ニューヨーク市に出て洋服商に就職した。商売に精を出す一方、四二歳の時ニューヨーク市教育委員会委員長に就任、恵まれなかったハリスは、当時急増していたアイルランド移民を含む貧者に高等教育機会を与えようとFree Academyを設立した。これはニューヨーク市立大学に発展する。

二) インド洋・太平洋貿易業時代よりニューヨーク市教育委員長を辞し、初代駐日総領事になるまで
家業の経営悪化に加え、敬慕する母親の死に見舞われたハリスは、ニューヨーク市教育委員会長を辞し、サンフランシスコで貨物船の権利を購入し、太平洋・インド洋で貿易業を開始する。

三) 初代駐日総領事時代よりピアス大統領に直訴の任命から

日米修好通商条約締結まで
一八五五年八月ペナンから急遽帰米し、ピアス大統領に初代駐日総領事任命を直訴した。ハリスは首尾よく任命を勝ち取り、併せて通商条約締結の全権を得た。一八五六年八月着任し、玉泉寺に領事館を開設したものの、攘夷派との折り合いがつけられない幕府との交渉はかみ合わなかった。条約勅許が得られないため、大老に就任した井伊直弼の命で無効許調印したのは六月月後だった。

条約は不平等条約とされるが、清国とアヘン戦争・アロー戦争を戦い、領土拡張を含む不平等条約を勝ち取った英国が、大艦隊を率いて来日する前に、ハリスが平和的な交渉で結んだ日米修好通商条約が、英国を含む他の列強との通商条約の規範となったのは幸いと見るべきであろう。

グローバル
ジャパン研究会
報告



担当
三島 研一

■四月二〇日 「バチカンが世界に果たす役割」
講師 上野 景文氏(文明論考家
元駐バチカン大使)
キリスト教は、西欧文明の

根っこを形成するが、バチカンそのものがひとつの「文明」をなしている。無理に黒白をつけるのは「不自然」と考えるアニミズムを語る自分としては、対極にある「一神教」の総本山であるバチカンに乗り込んで「文明対話」を行いたいと考え、赴任させて貰った。バチカンは、優秀な頭脳が多く、思った以上に「知的刺激」に富む。

宗教機関は、総じて、分裂する傾向が強い。その中で、世界性と歴史性を維持しているバチカンは、「特異」な存在。この点を理解するカギは、法王の「絶対」性。法王は「神と人間の中間的存在」。この法王の権威の下に、カトリック世界は「統一」、「一体性」を維持して来た。

バチカンの直面する最大の問題は西欧などの「世俗化」、「教会離れ」。特に西欧圏はその傾向が強い。カトリック教会の将来は、中国、インドなど、非西洋圏がカギを握る。

現フランスシスコ法王は異例づくめの人。初の南米出身者であり、初のイエズス会出身者。法王の国際的な存在感の根っこには、四つの力がある、(一)メッセージ力、(二)権威の力、(三)数の力(一三億人の信徒)、(四)外交の老舗で

あること。法王は、宗教対話にも熱心。「キリスト教対イスラム教」の対立と言うが、本来問題なのは、「反宗教勢力」と「伝統的宗教人」との対立。イスラムもキリスト教も等しく「反宗教勢力」の被害者。

日本は西欧と理念、価値観を共有するというが、無邪気にそう言うのは問題。日本人は、外国で(人権蹂躪などの)不正義が行われても、不愉快にならない。日本は(西洋から)理念こそ輸入したが、宗教的パッションは輸入しなかった。(文責 塚本弘)

■六月一五日 「Edward Grant, "Lyndon Johnson, 欠陥のある巨人"」
講師: 大井孝氏(東京学芸大学名誉教授)

留学の時期がジョンソン大統領の任期中と重なって、リアルタイムでジョンソン大統領の「成功と失敗」を身近に見聞きして、記憶にも未だ鮮明に残っている。

両親は貧しい地域で農場を経営していたが事業にも失敗、多額の借金を抱えてリンドン少年は幼少時代から貧困生活を強いられる。この経験が後に彼に、黒人やメキシコ人貧困者救済を志向させる。父親の縁故を借りて一九三一年テキサス州出身の連邦

下院議員の部下となり、ワシントンに移住。ニューデイル政策の柱の一つのNational Youth Administrationのテキサス州担当部長となる。

一九三四年地元出身の富裕家庭の娘Landy Birdと結婚、妻の支援を受けながら、二八歳で連邦下院議員に当選、地元の貧困地域に電力供給やその他の改善策を実施し、徐々に知名度が上がってゆく。戦後、連邦上院議員に選出され、一九五七年アイゼンハワー政権下で「民権法」の成立に尽力。

一九六三年、ケネディ大統領はテキサス州ダラスである「悲劇」に遭遇し、ジョンソンは予期せぬ大統領への昇格となり、ジョンソン政権が誕生する。

ジョンソン大統領が先ず手掛けた政策は人種差別撤廃と貧困対策の一連の立法に取り組む。輝かしい実績の反面、ベトナム戦争対策の泥沼に陥った。「トンキン湾事件」を契機に本格介入の道を選び、連邦予算の75%近くが戦費となり、教育・健康・福祉関連予算は15%となった。全米に反戦運動が巻き起こりジョンソン政権に対してはベトナム戦争への対応のまずさから、国民からの信頼感も失われて行った。結局、悪化したベトナム戦争の難問を抱えて、一九六八年三月にジョンソンは同年の大統領選に出馬しないことを宣言した。

ナム戦争の難問を抱えて、一九六八年三月にジョンソンは同年の大統領選に出馬しないことを宣言した。

■七月二〇日「国際協力最前線―感染症との戦い」講師：芳野あき氏(国際協力公衆衛生専門家)

芳野氏は、公衆衛生専門家として主にサブサハラアフリカや南アジアの国々に赴任して先ず実感したことは植民地化の影響がそれ等の国々の発展に大きく影響したという過去の事実ではなく、未だにそれが色濃く影響を及ぼしている進行形の事実であるという事である、と講演の口火を切られた。

アフリカ開発の課題と取り組むについて、欧州各国による植民地化の歴史に思いを馳せ、現在も尚残る貧困の格差や人種間の争い、政治腐敗、蔓延する汚職、脆弱なガヴァナンス、脆弱な経済社会基盤、高い失業率、緩やかな経済発展などが共通の課題であると見る。援助の在り方も既存のドナーの資金や援助機関からだけでなくゲイツ財団など民間の巨額な資金が入って来て、援助の在り方も徐々に変わりつつあると、氏は実感する。

に取残された人々を優先して支援し、格差が拡大しない様なシステムを構築することにある。二〇一二年頃から

「Universal Health Coverage」の推進が進められ、医療分野のみならず、保健サービスや制度を可能にする、法律。政策、行政等への取り組みが求められている。氏の専門分野の「エボラ出血熱流行の緊急援助」について、氏が二年半のコンゴ滞在中に三回もエボラ流行を経験、二〇一八年八月に始まり現在まで一、六〇〇人以上の死者が報告され、今でも決定的な打開策が見いだせておらず、封じ込めは難しい状況が続いている。

脆弱な保健システムのみならず資源をめぐる内戦、隣国などとの国境を越えた人・物などの移動の活発さも封じ込めを難しくしている要因である。氏がリードした二二名からなる「エボラ緊急対応チーム」も現場での度重なる襲撃と阻害を受け、設置した検疫所が夜間に打ち壊されたり、また国境なき医師団が運営する治療センターなどは火災の襲撃で焼き払われる被害を受けている。その様な危険な現場での支援活動に氏は「一度知ってしまったら、放つとけない」精神で多国籍の人々との関わりや一体感、世界の変化

現在のグローバルの主な課題は「格差の是正」であり、国の発展の恩恵を受けられず

を現場で体験できる事もこの自分の仕事ならではの強く感じている。

アフリカを経験して米国偏重の日本人が「欧州の視点」を持つ機会にもなり、また植民地化された側の視点も見えてくるようになった、とこの講演を締めくくられた。(文責：畠山朔男)

i-café-music&lecture 報告
担当 幹事 植木 園子

■五月二六日 i-café-music @ 四谷サロンガイヤール「岩倉使節団も味わったベルギービールの話」

五月二六日のi-café-musicは、元カナダ大使門司健次郎氏の『岩倉使節団も味わったベルギービール』と題した講演と大使が選り抜いたベルギービールの試飲を目玉に、新場所四谷サロン・ガイヤールで開催された。

第一部で、DVD「岩倉使節団の米欧回覧」第七章小国の知恵から「ベルギー」を上映後、大使にお話をいただいた。以下は門司氏自身のまとめ。『当時のベルギーは独立後四〇年強の若い国だったが、欧州でも先進の重工業国であ



門司健次郎氏と7種類のベルギービール

り、使節団は、製鉄所、ガラス工場、ブリキ工場始め多くの工場を視察した。その前に訪問した大国の力に感心しつつも、ベルギー、オランダの両国について、小国にもかかわらず、自主の権利を有し、経済や貿易で力を発揮していることに感心している。ベルギーはビールの博物館と言われるが、それは、銘柄の多さではなく、様々な異なるタイプのビールが醸されている多様性によるもの。私は二回のベルギー勤務で二五カ所の醸造所を訪ね、四二〇種類のビールを味わい、ベルギービールの虜になった。』
第二部「ミニコンサート」五月は歌が溢れ♪を挟んで、第三部交流会では、七種類のベルギービール(内二種は在日ベルギー大使協賛)を試飲しながら、小国ベルギーに思いを馳せた。(岩崎洋三記)

催し案内

2019年(令和元年)8月~10月

☆全体例会

十月二十六日(土) 13:30~16:30

「一五〇年記念プロジェクト並びにその進行について他」先行する担当グループからの報告に基づく討議の会

「会場」アリスアクアガーデン田町 JR田町駅西口一分田町センタービル ピアタ三階【会費】1,000円

☆米欧回覧実記輪読会

第21巻『英吉利国総説』(pp. 21-44) (富田兼任) 一〇月八日(火) 第22巻『倫敦府総説』(pp. 45-63) *実記輪読会 ・13:10~14:50 ・日比谷図書文化館四階 ・会員600円(非会員800円) ☆フルベッキ輪読会 九月六日(金) Ch. V. In Nagasaki:First Impressions (pp. 80-99) (栗明純生) 一〇月八日(火) Ch. VI. Political upheaval (pp. 100-114) *フルベッキ輪読会 ・15:00~17:00 ・日比谷図書文化館四階

・会員600円(非会員800円) ☆歴史部会 九月三〇日(月) 13:30~16:30 「日本の国境画定の歴史」【講師】小野博正氏(会員)【場所】国際文化会館404 十月二三日(水) 13:30~16:30 「幕末維新期の米国日本人留学生の活躍の総括」【講師】塩崎智氏(拓殖大学教授)【場所】国際文化会館404 ☆グローバルジャパン研究会 九月二二日(土) 13:30~16:30 「イノベーション大国イスラエルとどう付き合うか」

【講師】塚本弘氏(米欧亜回覧の会副理事長、日本イスラエル商工会議所会頭)【場所】国際文化会館401【会費】1,000円(会員)、1,500円(非会員) ☆i.cafe+music@サロンガイ ヤール四谷 九月八日(日) 14:00~17:00 【映像】西洋文明の源流イタリア 【お話】明治の洋楽発展に寄与した女性たち(幸田姉妹、三浦環、大山久子他)【講師】萩谷由喜子氏(音楽史研究家) 【♪】オペラ『蝶々夫人』から他 【交流会】会費3,000円(会員5,000円) ワイン、軽食付

特定非営利活動法人 「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この歴史的な大なる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会員 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回、全体例会があります。

部会 テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウム等を行っています。

機関紙 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局 「米欧亜回覧の会」事務局 近藤義彦 〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 1-1-5-707 E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp TEL 090-2658-1423

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。年会費などのお支払いは下記口座をご利用ください。

ゆうちょ銀行 振替口座(当座預金) 00180-0-635365 店番:019 総合口座(普通預金) 8804433 店番:018 三菱UFJ銀行 222-(普通)0544121

特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

歴史に学び、未来を考えませんか?

NPO法人米欧亜回覧の会 公式ホームページ

<http://www.iwakura-mission.gr.jp>

Facebook

Iwakura Mission Society 岩倉使節団・米欧亜回覧の会

編集後記

◇ホームページでは催しや部会報告が開催次第、順次トップページ「最近の投稿」に掲載され、さらに詳しい長文の報告や資料は会員のページ(要パスワード)に掲載する体制が整いつつあります。それによって発行が年四回と限られるNEWSは、ホームページ掲載の報告文を紙面の都合に合わせて要約して掲載しています。

◇今号は部会活動が活発で、全文を掲載することはできず、それぞれをかなり短縮しています。しかし、ホームページをみれば担当者が書いた報告文の全てを確認することが出来ます。また、トップページの「催し予定」に部会等の案内も順次掲載されるようになりますので、当会ホームページを「お気に入り」に設定して、定期的な閲覧をお願いします。

◇当会は、年四回の全体例会によって活動が全会員に公開されてきました。これからも基本路線は同じですが、岩倉使節団一五〇年記念プロジェクトがスタートするため、多少の変更がありそうです。なお、催事の計画についてはホームページ「催し予定」に掲載されますので随時、ご覧になってください。